

源氏物語少女巻「浜木綿ばかりの隔て」の解釈について

田辺 玲子

一、「浜木綿ばかりの隔て」の新旧二説

十二歳で元服した夕霧は父源氏の方針で厳しい勉強の日々を送っていた。それと同時に雲居雁とのままならぬ恋や、惟光の娘の五節の美しさにもひかれる思春期真っ盛りの夕霧であった。源氏は実子のいない花散里を夕霧の後見とした。その夕霧の垣間見た花散里の描写部分である。

ほのかになど見たてまつるにも、かたちのまほならずもおはしけるかな、かかる人をも人は思ひ棄てたまはざりけりなど、わがあながちにつらき人の御かたちを心にかけて恋しと思ふもあぢきなしや、心ばへのかやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめと思ふ。また向かひて見るかひなからんもいとほしげなり。かくて年経たまひにけれど、殿のさやうなる御かたち、御心と見たまうて、浜木綿ばかりの隔てさし隠しつつ何くれともてなし紛らはしたまふめるむべなりけり、と思ふ心のうちぞ恥づかしかりける（少女三の六八）。

傍線部「浜木綿ばかりの隔て」は吉澤義則氏の『対訳源氏物語新釈』（昭和二十七年・平凡社）の次に示す頭注解釈が現在ではほぼ定説になっている。

拾遺恋一人麿万葉四「み熊野の浦の浜木綿百重なる心は思へどたゞにあはぬかも」の「百重なる」をとって書いたので、幾重にも目隠し（几帳）をおいてその陰でいふ意味。諸説誤ってゐる。

（古注釈の説）

まず、吉澤氏が「諸説誤ってゐる」と否定した従来の主な説を年代順にあげてみる。

①『花鳥余情』

はまゆふはうすきものなれば几帳のかたひらをいふ也 榮花物語第廿六
そてくちのきぬのかさなりたる程のうらはまゆふにやあらむいくへと
しりかたし云々 これはかさなりのおほき事をたとへたる也

②『弄花抄』

几帳をいふ

③『細流抄』

几帳のへたてをいへり常は隔てはてたる事にいへりこゝにはうすき事に
いへりめつらし

④『孟津抄』

はまゆふはかさなるかたにいへともこゝにては一重と引かへていひなす
也薄く隔也忽別はへたてのあつきやうに心得るをこゝはそとのへたてなり
浜ゆふは茂く葉のかさなるものなり又葉はうすき物なからかさなれば
へたてのあつきことにも可用とそ

⑤『岷江入楚』 ①②③を引用

⑥『湖月抄』 ①③④を引用

①②は浜木綿とは几帳のかたびらの比喩ととる説である。③④は「几帳のへだて」を「浜木綿ばかりのへだて」と表現したという説。③④はともに、浜木綿は普通はその重なるの多さを表現するものと認めた上で源氏物語の当該箇所は「一重のうすいへだて」の形容に用いられている点が「めづらしく妙なる也」と評価している。要するに古注釈では几帳のかたびらを浜木綿のうすい（花か葉か葉鞘の）一枚に見立てた表現だという解釈をしている。当然その隔ては幾重にも重なる嚴重なものではない。

（近代の説）

次に吉澤説以来の解釈の主なものを年代順に紹介する。

①岩波旧大系 昭和三四年

【頭注】（お逢いなさる折は）浜木綿程の幾重もの間隔で（几帳などを間に立てて隔てて）花散里をあらわにせず顔を見ないようにしながら

②玉上評釈 昭和四〇年

【鑑賞】花散里とおあいになる時には几帳などを重ねて、わずかも彼女の顔が見えないようにしていらつしやることを示す。顔をみては花散里が恥ずかしがるであろう。そういう所まで源氏は気を配っていらつしやるのだが、夕霧の目から見てもこの源氏の心づかいはもつともだと思われる。

③小学館旧全集 昭和四七年（完訳・新全集もほぼ同じ）

【訳】幾重にも浜木綿ほどの隔てをおきつつ（欠点に目をつぶりながら）

何かと気をつかってとりつくろっておられるのであろう。

【頭注】「み熊野の」」（拾遺集）により「百重なる」の意に使った。幾重にも几帳や屏風を重ねたぐらいの隔てを置いた関係。

④新潮集成 昭和五三年

【頭注】浜木綿の歌にあるほどの隔てを置いては。几帳などを隔てに、直接顔を見ないようにするのをいう。「み熊野の」（拾遺・古今六帖三）はまゆふ）を引き、第五句を意味の上に利かせる。

⑤岩波新大系 平成六年

【脚注】幾重にも浜木綿ほどの隔てを置いて直かには接しないような関係をいう。

⑥至文堂 源氏物語の鑑賞と基礎知識 平成一五年

【訳】幾重もの隔てを置いて隠しながら

【鑑賞】「浜木綿」といえば「かさね」、「（思ひ）ます」という連想が続く。幾重にも思っているという一方で、「隔て」という捉え方もあった。「ばかり」とあっても、わずかばかりの隔てではなく、幾重もの隔てという意味である。

要約すると①②③④⑤⑥のように花散里の冴えない容貌をちらりとでも見ないように、幾重もの隔てをするという解釈が現在でも大勢を占めている。これを②玉上評釈のように「源氏の心づかい」と解せるのであるうか。花散里にとっては女心を傷つけるかなり失礼な扱いのようにも思える。唯一④集成は吉澤説をとりたてて槍玉にあげていないが、他説の

ように「百重」を支持していない。むしろ傍線部「第五句を意味の上に利かせる」によれば、直に顔を見ない心遣いをしていく程度にとれる。

また⑥至文堂の解説が「浜木綿ばかり」の「ばかり」という副助詞を「『ばかり』とあってもわずかばかりの隔てではなく、幾重もの隔て」という意味である」とするのは納得しがたい。『日本国語大辞典』第二版によると、この「ばかり」は第二番めの意味の「体言・活用語の連体形を受け、限定の意を表す。ほんのうだけ。うだけ。中古以後の用法」に該当するものであろう。また、同辞典で全四種に分類した「ばかり」の各用例を確認したが、数が多いという意味にはどれも使われていない。源氏物語中でも「ほんの几帳だけを隔てに」という「ばかり」の用例は多い。幾つか紹介する。

①男踏歌の日、紫の上・明石の姫君と玉鬘の初めての対面

西の対の姫君（玉鬘）は、寝殿の南の御方に渡りたまひて、こなたの姫君（明石の姫君）、御対面あり。（紫の）上も一所におはしませば、几帳ばかり隔ててきこえたまふ（初音三の一五八）。

②螢の宮と玉鬘

（螢の宮を）妻戸の間に御褥まゐらせて、御几帳ばかりを隔てにて、近きほどなり（螢三の一九八）。

③源氏と尼姿の女三の宮との隔て

今はまほにも見えたてまつりたまはず御几帳ばかり隔てて、またいとこよなうけ遠くうとうというはあらぬほどに、もてなしきこえてぞおはしける（横笛四の三四八）。

いずれも「ほんの几帳だけの隔て」という意味の「ばかり」である。

「浜木綿ばかり」の「ばかり」だけを「幾重もの隔て」ととるのは、そのような用例を示さない限りいかにも無理である。

以下「浜木綿ばかりの隔て」の解釈は、「一重のうすい隔て」と「幾重もの隔て」のどちらが源氏物語の読解において自然で妥当なのかを引歌という観点を中心に検討していきたい。

二、引歌の真意をめぐって

まず、この「浜木綿ばかり」という引歌の真意は吉澤説のように三句目の「百重なる」（万葉集では「百重なす」）を想起させる点にあるのだろうか。「み熊野の浦の浜木綿」までが「百重なる」を導き出す序詞であることはわかるが、序詞は引歌の技巧とは次元が異なると考える。引歌という観点からみると、五句の「ただにあはぬかも」を導き出す所に作者の狙いがある（注1）と私は推測する（前述④集成のみに同指摘あり）。即ち本歌が「心ではあなたのことを幾重にも思っているのに、直にあうことができない」という鬱屈した恋心を詠んでいるのに対して、引用箇所は几帳などの隔てで遮ることによって、花散里の美しくない容貌を見なくてすむという「ただにあはぬかも」である。本歌とは全く中身のすり替わった皮肉な内容である。さらに本歌はまだ逢瀬の成立しないプラトニックな恋情であるのに対し（万葉集では「柿本人麿が歌」となっており、配列から妻との相聞歌ととるところは言えないが、「人麿の作として伝誦された歌かとも思われ」という『万葉集全注』木下正俊の説に従う）少女巻の引用箇所は夫婦でありながら直に逢わない工夫（几帳などの隔て）をしているという点におかしみとペーソスが漂う。こ

れも源氏物語が新たに開拓した、本歌を意識的にずらした点に妙味のあ
る引歌（注2）のひとつととらえるべきではないか。ここで源氏物語の
ずらしの引歌の一例をあげておく。奪い去った小桂に詠んだ源氏の手習
歌に、千々に乱れる空蟬の女心の描写である。

かのもぬけを、いかに伊勢をの海人のしほなれてやなど思ふもただ
ならず、いとよろづに乱れて（空蟬一の二三〇）

傍線部は後撰集 七十八 藤原伊尹「女のもとに衣を脱ぎおきて取り
にやるとて」の「鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣しほなれたりと人や見る
らむ」を踏まえている。が、詞書が示すように本歌は「男が女の所に忘
れた衣」を卑下したもののだが、源氏物語では男女の関係が逆である。空
蟬が自分の薄衣が汗じみていなかったろうかと恥じ入る気持は、源氏へ
の思慕の裏返しでもある。本歌のユーモラスな味わいを一方で感じさ
せつつも、空蟬の切ない心情をにじませる源氏物語独特の引歌表現にま
で高まっているといえよう。源氏物語には同様の意図的と思われる本歌
との「ずらしの引歌」が相当数見られる。その点は後日稿を改めてま
めてみたい。

話を元に戻すが、従来万葉集の注釈では「百重」が浜木綿の花・葉・
葉鞘部のどの部分なのかという点ばかりが問題視されてきた（注3）。
この疑問は現在も完全に決着がついていない。このような事情から源氏
物語においても本歌の「百重なる」の語に気を取られ過ぎて、肝心の引
歌その物の解釈を見誤っているのではないだろうか。吉澤説も修辭上の
序詞の解釈に終始しており、引歌という観点を見落としていると思われ
る。但し「百重なる」のが花か葉か葉鞘部かという問題は本稿の論点で

はないので、ここでは深くとりあげない。

三、他の引歌の可能性―「浜木綿」と「隔て」

諸書が指摘する拾遺集六六八「み熊野の浦の浜木綿百重なる心は思へ
どただにあはぬかも」の本歌以外に、「浜木綿」と「隔て」の組合せの
歌が、少女巻の「浜木綿ばかりの隔て」には影響していると思われる。
清輔の『和歌初学抄』には「へだつる事にはハマユフ」とある。至文
堂解説も「浜木綿といえは、幾重にも思っているという一方で『隔て』
という捉え方もあった」とする。『歌ことば歌枕大辞典』にも同様の指
摘がある（注4）。時代順に検討していく。

「ゆきかへり千鳥鳴くなる浜木綿の心隔てて思ふものは」（亭子院歌
合・新撰和歌・新拾遺―初句「たちかへり」）は、「幾種もの歌集に収
録されているので、長期にわたってよく人口に膾炙した和歌であったの
であろう」（注5）と言われているが、「行ったり帰ったりしながら千
鳥が鳴いているらしい海浜の、浜木綿のように幾重にも隔てる心であな
たを思うでしょうか。そんなことはありません」という歌意。

古今六帖にも同じ「はまゆふ」の歌の五首のひとつに次の歌がある。
「み熊野の浦の浜木綿幾重かも我をば人の思ひへだつる」これも亭子院
歌合歌と同様の「幾重にも隔心をおく」という使い方であろう。

また『蜻蛉日記』上巻で作者の長歌に対する兼家の返歌（長歌）中に
も「浦の浜木綿いく重ね隔て果てつる唐衣」という句がある。これは心
の隔てばかりでなく、現実の夫婦生活の隔てをもさすものである。

他にも『落窪物語』に落窪の女君が道頼と右大臣の娘の縁談を聞いて
「隔てける人の心のみ熊野の浦の浜木綿いくへなるらむ」（注6）と詠

御髪などもいたく盛り過ぎにけり（初音三の一四七）。

花散里と源氏の間几帳などの隔てが幾重もあるとは到底読めない。
一面だけであろう。それも少し押すと花散里の衣装も髪の様子もすぐ源
氏の目に入るように書いてある。少女巻と初音巻の二年の間に源氏の花
散里に対する態度が極端に変わったとるのはいかにも不自然である。

ところで源氏物語の代表的醜女末摘花に対しては、源氏が明らかに見
ないための隔てをする次の描写がある。

滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などいとはしと思せば、まほ
にも向かひたまはず御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじくはなやか
なるに御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳ひき
つくるひ隔てたまふ（初音三の一五三）。

ここは明らかに末摘花の白髪まじりの髪や、特徴ともいえる赤い鼻を
決して見まいとして几帳で「ことさらに」隔てる典型的例といえる。

また源氏に老醜をさらすかも知れぬ母尼君をいさめる明石の御方の次
の言葉もある。

あな見苦しや、短き御几帳をひき寄せてこそさぶらひたまはめ。風
など騒がしくて、おのづから（明石女御の几帳の）綻びの隙もあら
むに（若菜上四の一〇六）。

これはまさに明石女御の几帳が風に煽られて、中にいる老尼君の姿が
あらわになることを避けるために、さらに三尺の短い几帳を重ねて見ら

四、「浜木綿ばかりの隔て」の中身

話を本稿の核心部分に戻すが、「浜木綿ばかりの隔て」とは吉澤氏の
言うように「幾重もの隔て」と解すべきものののだろうか。少女巻から
約二年後の初音巻の元旦場面には次のような描写がある。

御几帳隔てたれど、（源氏が）少し押しやりたまへば（花散里は）
またさておはす。縹（はなだ）はげににほひ多からぬあはひにて、

れぬようになさいませという「幾重もの隔て」の忠告である。このように源氏物語には美しくない人物などを、ことさらに見ぬ（又は見られぬ）ようにするための厳重な隔ての描写があることも確かである。また『榮花物語』にも保子内親王の母按察の更衣が、村上天皇に「もの老い老いしく少く古体なる有り様して、見まほしき気配やしたまはざらん」ために「三尺の几帳」ごしに対面しており、天皇に問いかけられても「几帳ながらみざりよりたまふ」という描写もある（巻第一「月の宴」）。しかし、さきに引用したように、初音巻で末摘花より先に訪れた花散里の所では源氏が「御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす」と描かれている。新全集の頭注も「源氏は末摘花の姿を見るにしのびない。花散里の所では源氏は几帳を押しやつた」とする。源氏は初音巻では花散里を積極的に見ようとしたのである。

源氏が明石の御方や女三の宮に対しても几帳を引きやつて中を覗くという次のような描写もある。

（源氏が明石の御方の）御几帳を引きやりたまへれば、母屋の柱に寄りかかりて、いときよげに、心恥づかしげなるさましてものしたまふ（若菜上四の一二五）。

（薫の五十日の日源氏が）几帳を引きやりて（女三の宮のそばに）ゐたまへば、いと恥づかしうて背きたまへるうつくしき子どもの心地して、なまめかしうをかしげなり（柏木四の三二一）。

いずれも隔てとなる几帳を引きのけて中の妻妾を見た源氏が幻滅するのではなく、それぞれに魅了されているといつてよい場面である。花散

里に初音巻の同様の描写がある以上、少女巻の「浜木綿ばかりの隔て」だけが几帳や屏風でバリケードのように幾重にも隔てをして花散里の顔や姿を決して見ないようにしたというのはやはり不自然である。

五、結語

冒頭でふれたように④集成のこの引歌の狙いは五句の「ただにあはぬかも」を連想させる点にあるという指摘は注目に値する。ただし、この卓見はその後の注釈に生かされていない。吉澤説以来他の注釈は「百重なる」即ち「幾重もの隔て」というイメージにとらわれ過ぎていて。それでは源氏と花散里の関係の読解にどうしても無理や矛盾が生ずる。

少女巻の「浜木綿ばかりの隔て」のさまざまな解釈を検討している中で、的確で自然な訳として目にとまったのが次の円地文子訳である（新潮社・昭和四七年）。

父君はそのような不器量、御性質を御承知のうえで、几帳などのほどよい隔てを置き、あからさまにお顔を見ないようにして何かと紛らしながら相手をしていらつしやるのもごもつともであるなどとお考えになる若君の心の内は、大人も恥づかしいほどである。

円地訳には引歌の指摘がある訳ではないが、現在の定説（幾重もの隔て）にとらわれることなく、実作者の勘で正確に場面を把握していると感じずる。これだと初音巻との描写の矛盾も起こらない。このように考えると几帳や屏風で幾重にも隔てを作り、絶対に花散里の顔を見ないようにするという現行の大勢を占めている解釈より、単なる几帳の隔てとと

る「細流抄」や「孟津抄」の方がむしろ妥当ではないかと思う。吉澤氏が「諸説誤つてゐる」と否定して以来、古注釈は採られていないが、今一度考え直すべきであろう。繰り返すが「浜木綿ばかりの隔て」は、本歌三句目の「百重なる」ではなく、結句の「ただにあはぬかも」を連想させるのが作者の狙いと気付く点が重要であると考える。

（注）

1 伊井春樹「源氏物語の引歌表現」『源氏物語の探究第五輯』（昭和五年・風間書房）に物語本文に実際に引用されるのは、第二句と第四句が多いが、読者に連想させるのは第五句が全引歌中の約半分を占めている。これは七音を持つ句が有効であり、詠者の表現意図が下句に置かれる和歌の構造とも関係するという考察がある。

2 河添房江「引歌―源氏物語の位相」『和歌文学論集第十集』（昭和六年・笠間書院）に「引歌表現はあたかも偏光を発するかのよう、本歌の趣意と別の貌を呈する場合が決して少なくないそれは自然発生的なずれにとどまらず、意図的なずらしの問題も包括していよう」とある。また河添氏以前の引歌研究史の流れの中で「ずらし」という語は使用していないが、はやくは尾崎知光氏の「本歌と源氏物語引用部分の表現の二重性」の指摘（「源氏物語に於ける引歌表現」『名古屋大学文学部研究論集I』昭和二十六年）『源氏物語私説抄』昭和五三年・笠間書院）があり、山口博氏の「引歌は屈折作用をするプリズムである」（「源氏物語の引歌」『源氏物語講座七』昭和四六年・有精堂）も同系列の指摘を深めている。さらには藤平春男氏は「詞は古きを慕ひ心は新しきを求め」という定家の本歌取の源泉は源氏物語の恋

3 「百重」を花か葉か葉鞘部かを論じたものの一部を以下にあげる。

【花】

・鴻巣盛広『万葉集全釋』昭和五年
・尾崎暢映「浜木綿小見」『古代文学』二二号 昭和五七年

【葉】

・袖中抄
・金子元臣『万葉集評釈』昭和一三年
・佐々木信綱『評釈万葉集』昭和二四年
・犬養孝「浦の浜木綿―浜木綿歌考」『万葉の風土』昭和三二年
・岩波旧大系 昭和三二年
・新潮集成 昭和五一年
・万葉ことば事典 平成一三年・大和書房

【茎―葉鞘部】

・和歌童蒙抄
・仙覚抄
・小清水卓二「濱木綿の百重なす考」『万葉』七号 昭和二八年
・沢瀉久孝『万葉集注釈』昭和三四年
・小学館旧全集 昭和四六年
・土屋文明『万葉集私注』昭和五一年
・小学館新全集 平成六年

4 『歌ことば歌枕大辞典』 渡辺泰明氏の「浜木綿」の解説

仁安二年（一一六七）の「清輔朝臣家歌合」（散逸）で藤原資隆が詠んだ「み熊野の浦の浜木綿見えぬまで幾重霞の立ち隔つらん」（夫木抄・一三五六六）には、浜木綿といえは「重ぬ」が普通で「隔つ」はおかしいという非難があった。しかし宇多上皇の「立ち帰り千鳥鳴くなる浜木綿の心隔てて思ふものかは」（新拾遺集・雑上・一七〇三）という例もある。

5 渋谷栄一『源氏物語の鑑賞と基礎知識 少女』平成一五年・至文堂

6 拾遺集恋四「屏風にみ熊野の形描きたる所」八九〇（抄三五〇）兼盛「さしながらひとの心を見熊野の浦の浜木綿幾重なるらん」の類歌か

7 一箇所に複数の引歌を想起するという考えは玉上琢弥氏（「所引詩歌仏典」『源氏物語事典』昭和三五年・東京堂）にも見られるが、伊井春樹編の『源氏物語引歌索引』（昭和五二年・笠間書院）を一覧すれば、長い源氏物語引歌研究史の中で、ひとつの引歌表現に対して時に複数の古歌を連想するという注釈の流れがあったことが納得させられる。直接には拾遺集六六八を本歌とすることに異存はないが、周辺の「浜木綿」と「隔て」の歌も併せて考慮する必要があるう。

8 古今六帖第三「はまゆふ」（一九三四〜一九三八）

人まろ

・みくま野のうらははまゆふもへなる心は思へただにあはぬかも
・みくまのうらははまゆふいくかさね我より人をおもひますらん

・おもひます人しなければみくまのうらははまゆふかさねだになし
・いとどしくうきみくまのはまゆふに重ねてものおもはせそ君
・みくまの野のうらははまゆふいくへかも我をば人の思ひへだつる

※源氏物語の本文は小学館新編古典文学全集による。括弧内に巻名と巻数頁数を示した。和歌の引用は新編国歌大観によるが、私に表記を改めたものもある。傍線はすべて筆者によるものである。